

2006 年度卒業研究

学籍番号	氏名	卒業論文タイトル
10314001	阿河佑子	里山における環境教育の役割 - あいな里山を手がかりに -
10314006	池田裕美	人を育てる博物館 - 環境教育を生かして -
10314022	岸田佳史	日独の環境政策について
10314024	木原真理子	日本におけるアニマル・セラピーの現状 - 人と動物の望ましい関係のために -
10314026	清見貴寛	環境教育を通じた価値観の転換 - 生物多様性保全を求めて -
10314032	澤田裕子	生育環境における人格形成 - 野生児の事例を挙げて -
10314033	三田絵梨	日本における喫煙環境の将来 - 欧州諸国との比較を通じて受動喫煙を考える -
10314036	清水 紳	人と自然の共生に向けて - 自然史博物館の可能性 -
10314046	田中理生	日本の環境意識の向上を目指して - コミュニケーションと創造の立場から -
10314053	中井清美	若者の成長過程におけるトラウマ - その環境と癒し -
10314066	浜崎清華	現代社会で「個性」を生かす、その環境とは - 「子ども」への「大人」の関わり方 -
10314074	広岡奈央未	里山の可能性を探る
10314078	藤井俊宏	
10314086	馬渡亜希	ゲーテの『色彩論』から見る色の価値観
10314100	山本朋愛	「つながり」の環境創造

< 目次 >

はじめに

第一章 身近な自然だった里山

第一節 里山の自然と人の関わり

第二節 自然と人の生み出す文化

第三節 新しい里山づくり

第二章 環境教育の場としての里山

第一節 自然保護の教育

第二節 郷土文化の教育

第三節 里山の環境教育に必要な要素

第三章 あいな里山公園の可能性

第一節 都会に残された自然環境

第二節 貴重な里山文化

第三節 環境教育への取り組み

おわりに

謝辞

注

参考文献

< 要約 >

近年、里山の放棄によって起こる問題が取り上げられるようになってきている。人の適度な管理によって保たれてきた里山の自然が失われつつあり、人が里山から離れることによって、里山の文化も失われてきている。里山の文化が失われるとき、里山の自然も荒れて、私たちは自然との対話の仕方を失うこととなる。

私たちの自然に対する傲慢さが引き起こした環境問題は、地球に生きる全ての生き物に無関係ではなくなっている。里山は、人と自然の付き合い方を示し、環境問題の解決の糸口ともなる。里山がなくなることは、私たちが生きる環境と無関係ではないのである。里山の必要性について、本論文では国土交通省国営明石海峡公園神戸地区「あいな里山公園」周辺地域を一例に考えていく。

「あいな里山公園」は、今後の市民・学校教育における環境教育の実践の場となることが期待されており、里山公園やその周辺地域社会での体験学習を通じて、地域の自然・文化・人間関係について考える機会にできると考えられる。

第一章では、里山の自然環境や里山文化について概略を述べ、里山が現在かかえている問題について論じる。第二章は、里山を舞台にして環境教育を行なうにあたって、環境教育とは何か、どのような教育が必要となるのかを論じる。そして第三章では、里山の事例として「あいな里山公園」を取り上げ、あいな自然・文化・人間関係について紹介し、環境教育の取り組みについて考察し、里山の環境保全のためのツールとしての環境教育について考える。

< 目次 >

はじめに

第1章 日本の博物館

第1節 博物館の仕組み

第2節 博物館の歴史

第3節 第三世代の博物館

第2章 欧米との違い

第1節 博物館の始まり

第2節 アメリカの博物館の現状

第3節 curator と学芸員

第3章 これからの博物館

第1節 エコミュージアム

第2節 チルドレンズ・ミュージアム

第3節 地域との連携

おわりに

注釈

参考文献

< 要約 >

現在、博物館と呼ばれる施設は 5000 館を越える。しかし、博物館法での定義に基づく登録博物館は20%ほどである。珍奇品を展示するだけの従来の展示方法では博物館運営は困難になり、箱物博物館からの脱却を目指し博物館は動き出した。

第1章では、現在の博物館の定義や目的や分類方法から博物館の仕組みを知る。また明治時代から昭和時代後期に至るまでの博物館の歴史を振り返り、時代背景に応じた博物館の位置付けから流れをふまえた上で、日本の博物館の現状について考える。

第2章では、博物館が知識の場から地位や権力の証明へと変化し、現在、集客率を重視した娯楽施設のようにになっていることやその打開策について調べる。また、アメリカにおけるキュレーター認証制度など日本の学芸員との違いを考察し、比較する。

第3章では、世界や日本で取り組みが始まっている新しい博物館であるエコミュージアムとチルドレンズ・ミュージアムにふれ、これからの博物館の位置付けや役割、人と博物館の関わり方について考える。

インターネットやゲームの普及に伴い、子供の学ぶ意欲や体感できる機会が失われてきている。子供は遊びや体験の中から自分の感覚で学び取り、それは考える力や学ぶ力にもつながる。日本には子供が実際に体験し学ぶことのできる施設がまだ少ない。しかし、現在参加体験型の博物館が増えてきていることは、人々が五感でリアルに感じることを求めている証拠である。昔のようなコミュニティーの関係がなくなってしまった今だからこそ、博物館には学ぶためだけの施設ではなく、人と人をつなぐ役割が求められている。

近年、地球環境は目を見張る速さで破壊され続けている。今では役所、企業、家庭などさまざまな場で環境政策に取り組んではいる。しかしながら地球環境は素人の目にも全く改善されていないことがわかる。逆に地球環境がより悪化され続けているのが現在の現状であることは言うまでもない。そのことをわれわれは十分に認知しているにも限らずなんらかの環境に対する対策行動には移っていないのが事実である。環境への影響の注意を払いながら行動をしていかなければ重大かつ取り返しのつかない影響をわれわれが住んでいる大地に与えることになる。そこで環境政策にもっとも取り組んでいる国の一つともいわれているドイツを取り上げ、ドイツと日本の環境政策の事例をいくつか紹介しつつ比較し、今後われわれはどのような行動を起こしていかなければならないのか。またドイツの環境政策を参考とし、日本でも活用できる対策があるはずなのでどういった対策が日本でも応用して取り組むことができるのかといった2点について考えていきたいと思う。環境政策と言ってもその分野はとてつもなく広い分野であるのでここでは3つの問題を中心として考えていきたい。ごみ問題(リサイクル、リユース)、自動車公害、太陽エネルギーによる政策の以上である。

1章では今述べたように3つの環境問題による政策の現状を日本について述べたいと思う。戦後の日本は、高度経済成長を経て一気に先進国へと成長を遂げた。そんな中、企業は、大量生産、大量消費という社会スタイルを確立させてしまった。つまり、あらゆる製品を大量に生産し、その大半をゴミとして国民に捨てさせることを通して成長をとげ、結果、大量廃棄社会をも同時に作りだしていったのである。また、大規模小売店(例 コンビニエンスストア)の増加、高速輸送網の発達といった生産・流通システムの肥大化も高度経済成長とともに成長し、ゴミの増大に大きく影響を及ぼした。その原因の一部は買い物等で多く配布される袋が重要な問題となる。自動車公害については多くの問題がある。一家に一台は当たり前となっている自動車の所有、路上駐車による道路の渋滞化など様々な点が挙がっている。これらの重要問題点は自動車による環境政策の取り組み意識の低さにあるようだ。太陽政策についてはあまりに取り組みがされていなく、住宅等にもほとんど設置されていない。もっと住宅を購入する際に太陽パネル等を最初から設置して売る等のアイデアがいりそうだ。

2章では環境政策にもっとも取り組んでいる国の一つであるドイツの環境問題による政策の現状について述べたいと思う。しかし、ドイツも20年ほど前はまだ紙もガラスも生ゴミも一緒に埋め立て処分されていたのである。80年中ごろから地域によって資源リサイクル活動が活発になってきた。ドイツのゴミ問題についてはリサイクルのほかにリユースというものがある。リユースとはピンを使用する方法である。まず市販されているリユースビンに入っている飲料を買う。飲みきるとそのピンをスーパー等へ返却する。その後はメーカーが集められたピンを洗浄し新たに飲料を入れ販売されるというシステムである。このシステムはリサイクルに比べ工程による費用も廃棄物も少ないのがメリットである。自動車交通についてはパークアンドライドといった政策が行われている。パークアンドライドとは、公共交通機関が近辺にない人が、自動車で公共交通機関の駅まで行き、自動車を駐車場に駐車し公共交通機関に乗り換えるという意味である。ドイツではこういったことを行う人が多く、パークアンドライド用の駐車場まで完備されている。自動車でなく、自転車でもパークアンドライドをしている人もいる。このことからドイツ人は環境についての意識が高いことを意味している。太陽エネルギーについての政策。ドイツにはロルフ・ディッシュという建築家がいる。彼はエコ建築家と呼ばれ、太陽エネルギーを使った住宅を建築している。それはデザインにも優れ、通常の住宅とほぼ同じ金額で販売されている。そのことから環境について感心がある人々は購入されている。実際にすべて完売である。また住宅だけの小規模ではなく住宅地全体が彼によって太陽エネルギーを用いた住宅地となり販売もされている。

3章では3つの環境問題についての日本とドイツの環境政策の比較について述べている。結果を見てみると日本の環境政策はドイツに比べ劣っている。まず政策の方法などではなく、人々の環境への意識の低さが問題であると考えられる。その他にも国による支援も日本は確実に少ないと言えよう。日本の政策はどれも規模が小さく、情報や宣伝活動なども国民に知れ渡っていない。忘れてはならないのが国を動かすには一人のカリスマ的な人物だけではどうにもならないということである。国民の一人一人が環境に意識を向け、考えていかなければどうにもならないであると考えられる。そのためには学校教育についても考える必要性も見えてくる。日本には幸いに原生林や雑木林といった自然の姿に近い豊かな自然がまだ残っている。つまりまだまだ可能性があるがもう時間はない。今後、母国の環境は自分たちで変える。そしてまずは自分の生活を改めて見直し率先して変えていかなければならないという個人の公共に対する責任意識が必要とされているのである。

目次:

はじめに

第一章 人と動物の関わりの変容

第一節 家畜からペットへ

第二節 ペットからコンパニオン・アニマルへ

第三節 コンパニオン・アニマルから治療補助動物へ

第二章 アニマル・セラピーの現状 - ホース・セラピーに焦点をあてて -

第一節 アニマル・セラピーとは

第二節 ホース・セラピーが人に与える効果

第三節 動物への思いやりの不足

第三章 アニマル・セラピーのこれから

第一節 人と動物の相互作用 - 人間本位のセラピーからの脱却 -

第二節 人と動物の関係の一例 - 馬と触れ合うことの体験から -

第三節 人と動物の望ましい関係のために

終わりに

要約:

人と動物の関わり合いは古い。歴史を通してみると、動物は人のために多くの役割を果たしてきた。動物は、護身、使役、スポーツなど様々な利益を人に提供してきた。近年では、超高齢化や少子化、核家族化などにより、動物を「コンパニオン・アニマル(伴侶動物)」として家族の一員に加えるようになってきている。科学的研究によっても、動物は人間の孤独を軽減したり、生きる支えとなったり、治療の役割を果たすといった効果が明らかになっている。日本でも、このような効果を応用した「アニマル・セラピー(動物介在療法)」が注目されるようになってきた。しかし、治療の補助的役割を持った動物をどう受けとめ解釈するかは、あまり問題にされてこなかった。アニマル・セラピーにおいて動物が犠牲となった例を挙げ考察することで、人と動物の望ましい関係について考える。そこから浮かび上がってくる問題は、単に動物に携わる人の問題ではなく、社会的存在と捉え、社会全体で取り組む意識を持つことが重要である。そこで生まれた意識改革によって、動物のみならず、老人や子供、病人などが社会で弱者になることもなくなると考える。人が変われば社会が変わり、社会が変われば人が変わる。そのことが両者の住みやすい場所になり、更に人と動物の可能性を広げる。

< 目次 >

はじめに

第一章 生態系における人為的影響

第一節 生態系のバランスの崩壊

第二節 外来種の影響

第三節 原生自然と二次的自然

第二章 「生物多様性」保全の必要性

第一節 「生物多様性」の危機

第二節 「生物多様性」の経済的価値

第三節 「生物多様性」の倫理的価値

第三章 環境教育による価値観の転換

第一節 人間中心主義からの脱却

第二節 環境教育の目的と目標

第三節 環境教育における体験学習の意義

おわりに

(要約)

今日に至るまで、さまざまな分野での研究や開発によって、科学は進歩してきた。それにより、私たち人間の生活は日々、快適になっている。しかし、環境問題は日々悪化している。大気汚染、水質汚染、土壌汚染、地球温暖化などさまざまな種類の環境問題が表面化してきているが、これらはすべて、人間の生活や活動によって引き起こされたといっても過言ではない。そのような人間の生活や活動によって引き起こされた環境問題は、生態系と大きく関わっているのである。生態系に大きな影響を及ぼしているということは、生態系の一員である人間は自分たちにも大きな影響を及ぼしているということではないだろうか。最近では、環境問題に対する認知度が高まっているが、それだけでは環境問題解決にはならない。現在、生態系では何が起り、人間は何ができるのかということを深く理解することが必要だと考える。

本論文では第一章で、人間が生態系と関わりをもつことによって生じている問題を述べ、原生自然と二次的自然を例に出し、人間と生態系との関わりを述べる。第二章では、生態系においてもっとも重要だと考える「生物多様性」に起こっている問題と、「生物多様性」が社会に与えている影響を述べる。そして第三章では、第一章、第二章で述べた事柄を理解し、人間中心主義という価値観を転換するためには、環境教育により「体験」することが重要であり、必要であるということを述べる。

<目次>

はじめに

第一章 三種類の野生児

第一節 アヴェロンの野生児 ヴィクトール

第二節 動物に育てられた子供 アマラとカマラ

第三節 地下牢の17年 カスパー・ハウザー

第二章 人間的行動の発達

第一節 身体的機能の発達

第二節 感情的機能の発達

第三節 社会的機能の発達

第三章 遺伝と環境

第一節 人間の独自性 ヘレン・ケラーの例

第二節 環境の重要性

第三節 遺伝と環境の相互作用

おわりに

注

参考文献

<要約> 昔々から人の性格なり、能力は遺伝で決まるのか、環境によって決まるのかという論争があった。しかし、その議論に大きな一石を投じることになった、人間社会から隔絶された環境で育った子供の事例が数多く報告されるようになった。その中で一番多いのが、動物に育てられた、特に狼に育てられたという子供たちであるが、他にも豚に育てられたという事例もある。まれに人間の世界に連れ戻されて、普通に育ったということもあるが、多くは言葉も覚えられず、習慣も育てられた動物のままのことが多い。何よりも驚くのは、人は生まれながらにして人なのではなく、狼に育てられれば、狼のようにもなり得るということである。ヘレン・ケラーも幼少期は、まるで手のつけられない小動物のようであった。しかし、彼女はサリバン先生と出会い、やがて服従という最初の教訓を学び、そして、拘束が楽なものだと気づいた。もし、彼女がサリバン先生と出会っていなければ、人間というよりも、まるで動物のように暮らし続けていたかもしれない。

そこで、人は生まれながらにして人なのではなく、人になっていくということをふまえた上で、人間の人格形成について考えていく。第一章では、三種類の代表的な野生児の発見から生涯を終えるまでを、第二章では野生児たちのさまざまな発達過程を、そして第三章では野生児を通して考えられる人格の形成について述べていく。人間は、学ぶべきちょうど適切な時期に言葉を学ぶことこそ、人間のあらゆる知的生活を条件づけるものとなるのである。人間にとって環境はとても大切であるとともに、環境によって人間は変わると考えられる。特に子どもに与える影響は大きく、歳が下になればなるほどその傾向が強い。

人間が人間になるためには人間の手によって保育、教育されてはじめて人間になるのである。

(目次)

はじめに

第一章 受動喫煙とは何か

第一節 受動喫煙の定義

第二節 受動喫煙による影響～健康面から考える～

第三節 受動喫煙による影響～非喫煙者の立場に立って～

第二章 日本と欧米における受動喫煙についての価値観の差

第一節 「嫌煙権」にまつわる動き～反喫煙運動～

第二節 公共施設での動き～分煙～

第三節 タバコ産業を中心とした動き～広告～

第三章 受動喫煙を減らすには

第一節 医療の視点～禁煙外来～

第二節 教育の視点～喫煙防止教育～

第三節 世間の視点～ライフスタイルを変える～

おわりに

注

参考文献

要約

近年、日本でもようやく受動喫煙という言葉がテレビや雑誌などでも取り上げられるようになり、広く知られるようになってきた。病院はもちろん、図書館や駅といった公共施設でも分煙や全面禁煙が進んでいる。中でも東京都や和歌山県では、たばこ対策のガイドラインを自治体独自で、数年前に作成し公開している。

しかしながら、日本人の成人男性の喫煙率は先進国の中で最も高いという現状がある。それに加え、飲食店に関しては健康増進法の施行から2年半以上が過ぎても受動喫煙対策がなかなか進んでいないのが現状である。

そこで、受動喫煙の問題の対策が日本よりも進んでいる欧米との比較を通して、日本における受動喫煙がどう変われる可能性があるかについて考えていく。

本論文の第一章では、受動喫煙がどのようなものかを考え、この問題を解決する為の糸口を見つける手がかりを見出していきたい。具体的な内容としては、まず第一節で受動喫煙の定義を探っていき、第二節では非喫煙者の受動喫煙による影響を健康と気持ちの変化の両面から述べていきたい。続く第二章では、受動喫煙をめぐる日本と欧米の価値観の差について三つの具体例を挙げて考えていきたい。それぞれ国柄やこれまで辿ってきた歴史が違うため、比較しにくい所もあるが、具体的にデータを用いながら考察していきたい。また、第三章では第二章で述べてきた日本と欧米との受動喫煙における価値観の差をふまえて、これから日本の喫煙環境がどう変わっていくのかを医療、世間、教育の三つの視点から考えていきたい。

喫煙環境、それは私たちの生活に深く結びついているものであり、身体的にも精神的にも大きな影響を及ぼす環境の一つである。そしてこの環境は、私たちの意識の持ち方によってどんどん変えていける。そこで日本だけの狭い範囲にとどまらず、範囲を欧米にまで視野を大きく広げていくことによって、「今後の日本の受動喫煙はどうすれば減らしていけるのか」という点について考えていくことがこの論文の最終目的である。

目次

はじめに

第一章 自然史博物館の活用

第一節 社会教育機関としての博物館 生涯教育への活用

第二節 普及啓発活動における教育的意義 家族で学ぶ

第三節 学校教育との連携 教育カリキュラムとの融合

第二章 コウノトリの郷に学ぶ

第一節 コウノトリの郷公園 “今”を伝える生きた展示

第二節 豊岡市の取り組み 農業から始める環境再生

第三節 コウノトリを空へ 地域意識への呼びかけ

第三章 自然史博物館の可能性

第一節 自然との共生 課題と向き合う

第二節 言葉から始まる意識の見直し 自然と共生できる社会の構築に向けて

第三節 これからの博物館のあり方 未来の博物館像

おわりに / 謝辞

< 要約 >

我々人類は、著しい産業の発展から21世紀を迎えた現在に至るまでに多くの資源を自然から切り取り、地球環境を破壊してきた。そしてそれらはもう決して取り消すことのできない我々の文明の足跡でもある。近年はそうして傷つけられてしまった自然との関係回復を求める声が多く叫ばれているが、我々は現在の地球環境が抱える諸問題とどのようにして向き合っていけば良いのだろうか。

人類がその短い歴史の中で一瞬にして奪ってしまった自然は、地球が気の遠くなるような年月をかけて育んできたものばかりである。そのため、地球環境が抱える諸問題のそのどれもが、容易に解決できるものではない。我々がその問題を一つ一つ解決していくには、行動を起す前にまず過去に学び、現状を把握することから始めなければならないだろう。そして、そのような知的需要に対応した公共施設として自然史博物館が設けられ、展示や教育普及活動を通して自然界の構造や諸問題を我々に説き、自然の尊さを過去から現代へ、現代から未来へと伝える架け橋として、我々の生活にとって身近なものになりつつある。

また、博物館は他の博物館や地域住民などの様々な組織と連携をとることによって、社会教育、学校教育、家庭教育といった様々なジャンルの教育に対応できる。この特性を自然史博物館では環境教育に活用し、先に挙げた様々な地球環境の問題と向き合っていくための地域の拠点としての可能性についてもふれていきたい。

第一章では、自然史博物館を中心に、博物館の活用と社会的価値について述べ、第二章では事例として今年度ヒアリング調査を行なった兵庫県立コウノトリの郷公園を挙げ、その取り組みから学んだ自然史の展示、普及活動の可能性について述べていきたい。そして、第三節ではそれまでの章で述べてきたことを踏まえて、人と自然が共生を果たすためにできる、これからの博物館の可能性についてふれていきたい。

はじめには、まず環境という言葉の位置づけを捉え、日本という国が世界の中で環境というキーワードで、技術面と意識面の二つの立場からみた現状を考え、今後はいかに多くの人の環境意識を向上していくかが大切であるという問題提起をしている。また環境意識という事をこの卒業研究の題名にし、取り上げたきっかけとなった新聞の環境広告を通しての実体験とその事に関連した私自身の今後社会にでてからの目標を述べている。

そして第1章では、コミュニケーションの立場から環境意識の向上を考え、第1節では「環境コミュニケーション」という持続可能な社会の構築を目的として企業や行政、市民といったさまざまなセクター同士が、情報を共有することで意志や情緒の疎通を図り、パートナーシップやコンセンサスを形成して具体的な環境行動を実践していく新しいコミュニケーションを理解する。

第2節では、環境コミュニケーションのなかでも特に受けての環境意識を啓発し、環境行動を喚起することを意図し、工夫されたコミュニケーションを「エコ・コミュニケーション」と呼んで区別し、環境コミュニケーションが目指すべき方向として取り上げている。

第3節では、京都議定書という環境用語の意味を知っている人の数が短期間で驚異的に伸びた事例を挙げて、コミュニケーションが重要であることを示すと同時に、マス・コミュニケーションが環境知識を普及させ環境に対する意識を高めていく力のひとつになりうる可能性があることを述べている。しかし一方で、現在の報道の弱さや曖昧さもあることを述べている。

第2章は、前章最後で触れたマス・コミュニケーションでもある広告という創造の立場から環境意識の向上を考え、第1節では環境広告という従来の商品広告、産業広告、企業広告などを環境保全をテーマに横に輪切りにしたジャンルを取り上げ、日本の環境広告の原点でもある環境先進国スウェーデンの企業ボルボの広告の例を挙げ環境広告というものを理解する。

第2節では、広告・コミュニケーション産業の今後のキーポイントを論じ、広告産業が他の多くの業界とは異なっている点、企業責任を述べている。そしてこれら全てが互いに機能した時、広告というものが環境意識を高める可能性が多いにある事を論じている。

第3節では、広告会社と密な環境コミュニケーションをとり、車をただ売るだけではなく、環境というものを世間へと伝え人々の環境意識向上に貢献しているトヨタ自動車の取り組みについて書いている。

第3章は、アメリカ、イタリア、日本のエコライフスタイルという新しいライフスタイルを理解し環境意識をいかに向上させていくかを考え、第1節はロハスを理解し、またこのロハスを学ぶ中で自らが環境コミュニケーションを行い、地道で未だ結果はでていないが環境に対する取り組みへと一歩前進した実体験も述べている。

第2節では、スローフードについて理解し、日本でも食の多様化が進み、その結果成人病の増加といった問題が生じている現状を論じ、それに比べ伝統的な食がもたらす効果を論じている。

第3節では、「環の国」というものを取り上げて、最近では世間の人々の間でも話題になり浸透した提案を環境省は積極的にやり始めている現状を捉えながら、一方で不安要素も取り上げている。

おわりにでは、自らがしているサーフィンを通して肌で感じている自然環境悪化について取り上げ、だからこそしている環境に対する配慮を述べ環境に対する配慮が無限にあるのとは対照的に有限なのが自然環境である事を論じている。そしてきっかけの大切さを述べ、環境意識向上のきっかけ増加のためのコミュニケーションの更なる活性化、また単に物を売るための広告ではなく一歩先へと踏み出した宣伝をしていく必要がある事、そして何より少しずつ進み出している人間と自然との対話を決して止めずにこれからも持続していく必要性を論じている。

(1,600字)

< 目次 >

はじめに

第一章 成長過程におけるトラウマ

第一節 トラウマの種類

第二節 子どもと大人のトラウマの違い

第三節 子どものトラウマのタイプとその影響

第二章 トラウマの原因

第一節 トラウマの外的要因

第二節 トラウマの内的要因

第三節 トラウマの進化

第三章 トラウマを癒す

第一節 さまざまな心理療法

第二節 治癒のプロセス 親が子どもにできること

第三節 対処の難しいトラウマ 専門家の助けが必要な場合

おわりに

引用文献

参考文献

< 要約 >

近年、残虐行為やいじめによる自殺など、予想もしなかった悲惨な出来事が、あいついで私たちの身の周りに起きている。天災によって生活の基盤を根こそぎにされたり、突然、理不尽な殺傷に巻き込まれたりした人たちの苦しみの声を耳にすることも多い。

こうした状況の中で、日本における「心のケア」の立ち遅れが指摘され、PTSD(ポスト・トラウマティック・ストレス・ディスオーダー)といった、一般人にはまだまだ耳慣れない言葉がメディアをにぎわすようになってきた。その中に含まれるトラウマ(心的外傷)とは、「自我が対応できないほどの強い刺激的あるいは打撃的な体験が与えられること*1」をいう。大人であってもトラウマを受けることはもちろんあるが、ここでは焦点を子どもに合わせてみることにする。子どもはまだ自我が確立しておらず、強烈な体験をはねかえす力などないからである。それどころか成長するなかで、自我が形成されてゆく道筋までも、トラウマによって大きく変えられて人生までも変えていくかもしれない。トラウマは心の傷である。この傷を癒すには時間がかかり、親や身近な大人による理解と支えと保護とが不可欠である。第一章で、トラウマの種類、子どもと大人のトラウマの違い、トラウマのタイプや影響を述べ、トラウマというものをさまざまな視点から考える。第二章では、トラウマの原因について述べ、トラウマの誕生について考える。第三章で、これまで述べてきたことをふまえ、本題であるトラウマを癒すことについて考察する。子どもは心の中で、自分自身の物語を絶えず綴っては書き直している。新しい経験をすれば、物語の中にそれを織り込まなければならない。トラウマは、子どもが綴っていく物語の中で、なんらかの意味をもつことになる。トラウマは、放っておけば、そのうち都合よく厄介払いできるというものではない。時間がたちさえすれば治るというものではないし、その子どもに生まれつきの回復力があれば必ず治るというものではない。

しかし、周りの身近な人々や親が、子どもがその衝撃的な経験を理解し、物語の中に組み込むのを手助けしてやることは出来る。子どもと共に、過去の記憶や亡霊に立ち向かうことは、子育てでぶつかる困難の中で最もつらい作業といえる。けれども、その作業には、子どもの人生に長く影を落とすであろう、トラウマの意味を変えることが出来るのだから、大きな希望と力がある。

子どもが大人を「馬鹿にしている」と言われ始めたのはいつの頃からだろうか。以前は、社会、学校、家庭における身近な「大人」は、子どもにとって信頼できる存在であり、また怖い存在でもあった。したがって、子どもは大人からの注意に従順し、またせざるを得なかった。そういった関係を当たり前だと思ってきた私たちにとって、今日の現状には違和感を感じずにはいられない。文明の発達から機械化が進み、人々はあらゆる仕事を便利なものに頼るようになった。また、情報社会となりどんな情報を得ることも、他者といつでも連絡を取り合うことが容易になった。こういった社会は「知識」を得て、実際の体験を重ねることによって「知恵」として身に付ける機会を大幅に減少させ、これらは大人だけでなく、子どもの世界にも共通している。遊びを含めた共同生活により経験や想像力が豊かになる時期をバーチャルな世界に夢中になるなどして、現実との区別もつかないような発想や判断をしてしまうようになる。そして、現在のような大人と子どもの縦の関係を十分に築いていない日常の中で成長した子どもには、社会生活における規律やモラルを守る意識や、他者や集団における自己の位置関係や責任感などが十分に身に付かず、ニートなどに代表される、社会人としての働くという義務を果たさないライフスタイルさえも「個性」と主張するようになってしまう。しかし、このような我が国の現状に疑問を持ちつつも、やはりその中に眠っている本当の生かすべき「個性」を見逃すわけにはいかない。しかしながら、子どもの育成上良くないと思う情報源を完全に妨げることなどありえない。したがって、子どもが自らどれが正しくどれが間違っているかという判断力を、成長する段階で得ていくしかない。そして、その段階に関わる大人、つまり、家庭における親、学校における教師が主に大きな影響を及ぼす重要な立場なのである。

大人が子どもにとって尊敬の念を抱き、慕う存在である程、子どもの人生を充実したものとする。親は常識やマナーを教え、教師は学問的知識や集団におけるマナーを教える。そして両者は、自らの立場を放棄し子どもを軽視することなく、また、直接的なコミュニケーションを怠ることなく、互いに相乗的な効果を持つように光に連携をとることで、子どもの個性を生かした将来へと導く。複雑化する現代社会の中においても、子どもの心の中は単純な部分もあり、純粋なままなのである。大人が子どもに対してすべきことは、まず安心して自分の人と違う感覚を表現できる環境を作ること、そして、子どもにあらゆる体験をさせてやり、そのすぐそばで見守ってやることである。

はじめに

第一章 伝統的農業から享受したもの 生物・景観・心

- 第一節 伝統的農業と生物多様性
- 第二節 実感を伴う自然観 心
- 第三節 景観 日本人の心に残る原風景

第二章 国営明石海峡公園あいな里山公園の具体例

- 第一節 あいなのくらし
- 第二節 伝統的農法やその他ため池など
- 第三節 あいなの果たす役割

第三章 これからの環境保全～市民の積極的参加～

- 第一節 里山保全活動
- 第二節 環境教育の場としての利用
- 第三節 里山公園の展望

おわりに

<要約>

高度経済成長により近代化が進んだ人々の生活から身近な自然環境は少しずつ遠のいていった。

その身近な自然環境を支えていたのが日本の農業であり、人と自然が共生する場、「里山」であった。「里山」は田、雑木林、ため池など人間が生活するために自然に手を加えた、管理することによって維持されてきた二次的自然である。

二次的自然は、さまざまな環境が組み合わされており、この環境に依存して多様な生物が生息している。そして、伝統的農業が行われていた里山では伝統的農村景観が形成されていた。また、生活と生産活動による文化や技術が伝承される場でもあった。

生活や生産活動と密接に結びついて作りあげられた二次的な自然である里山を「持続可能な自然保全」の形と再認識し、最近では都市住民や企業、NPOなどが里山運動を行なっているまた、最近では子供たちの環境教育のフィールドとしても期待されている。里山には生物多様性、伝統文化、地域の人々とのコミュニケーションなど数多くのことを学習できる材料があるからだ。

一章では自然環境、文化、人間関係などの学習の場と言う側面をもつ里山が私たちの生活に与えてくれるものをいまいちど考え直して論じ、二章では神戸市北区の藍那地区で行なったヒヤリングをもとに具体的な里山の暮らしを振り返り、三章では今後増えていくと見られる市民参画型の里山保全活動の課題と展望について論じ、模範的な持続可能なシステムとして、里山に期待されている多くの可能性を探る。

人間と環境を結びつけるコモン・センスの役割 共通感覚論を手がかりにして

10314078 藤井俊宏

- 一 常識とコモン・センス
- 二 社会通念としてのコモン・センス
- 三 コモン・センスと自明性の喪失
- 四 コモン・センスによる知の組み換え
- 五 コモン・センスと記憶
- 六 コモン・センスと時間
- 七 コモン・センスと「場所」の問題

常識とは、私たちの間の共通の日常経験の上に立った知であるとともに、一定の社会や文化という共通の場の中での、わかりきったもの、自明になったものである。そして、コモン・センスとは、諸感覚に相渉って共通で、しかもそれらを統合する感覚、私たち人間のいわゆる五感、つまり視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚に相渉りつつそれらを統合して働く総合的で全体的な感得力センス、つまり、共通感覚のことである。

社会通念としての常識は、共通感覚による諸感覚の統合のある仕方が習慣化されて人々に共有されたものである。そして、共通感覚が諸感覚を万全に働かすことができるように感覚を組み換え、本来の共通感覚の働きをとりもどすことが必要になる。常識がそのようにみずから高まる力と可能性をもっているのは、共通感覚がみずからを組み換える力と可能性をもっているからである。

また、共通感覚という基本的な感受性は、人間と世界とを根源的に通路づけ、人間にとって、世界というものを現前させる働きをもっている。そしてその感受性が欠けると、世界は単なる感覚刺激の束として私たちの感覚表面に突きささってくるカオスにすぎなくなる。私たちの方からそれを積極的に世界として構成することができなくなる。

五感あるいは諸感覚の組み換えとは、私たち人間の具体的な知覚が、五感のうちの一つの感覚が中心になって統合されたものから、他の感覚が中心に統合されたものに組み換えることである。

そして、近代文明の視覚の独走、また視覚の専制支配に対して、かつてから多くの人々によって、触覚の回復が要求されてきた。視覚の独走は、人間と自然、人間と人間との間に冷やかな分裂、対立をもたらした。それに対して、人間と自然、人間と人間をそのような分裂や対立から救い出し、ふたたびそれらを結びつける力をもっているのは触覚だ、と考えられたのである。ここで、知の組み換えが行われたのである。

つまり現代社会においての五感の組み換えが、感覚麻痺や感覚閉鎖という事態から脱却して、総合感覚としての触覚によって行われる必要がある。視覚の優位という現代社会の問題とともに、触覚のもつ働き、触覚と視覚や他の諸感覚との関係について考える必要がある。

共通感覚と想像力の関係は、次のようなかたちで捉えられる。感覚は、個別感覚としては対象に対して受動的であり、共通感覚としては、統合力をもったものとして能動的である。これに対して想像においては、共通感覚は、感覚印象によって働きかけられているから、受動的なものとなるものである。ここで感覚と想像とは、ともに受動であるにしても、感覚においては対象の働きかけが直接であったのに対して、想像ではその働きかけが印象の持続として間接的である、という相違がある。想像の方からいうと、感覚作用によって以前に与えられた心像を保つためには、共通感覚による感覚作用の持続を俟たなければならず、想像はその基礎を一般的で中心的な共通感覚にもつことになるのである。そして想像は、記憶および想起の基礎であり、それは記憶および想起と共通感覚とを結びつける具体的な環を形づくっているのである。

社会的時間水平の時間と文化的時間、垂直の時間とを、それぞれ水平軸と垂直軸としてとらえれば、この二つの軸のさまざまな組み合わせあるいは絡み合いのうちに、生きられる重層的な時間が成り立つのである。

つまり私たちは自然の時間のリズムと同調して生活することが望ましいのである。

現在、場所についてさまざまな角度から問題になってきている。その主なる角度を考えると、根拠的なものとしての場所、身体的なものとしての場所、象徴的なものとしての場所、問題の具体的な考察と議論にかかわるものとしての場所の四つにまとめられる。

また、場所とは環境を構成する空間軸の側面のことである。空間認識の基準は「理性」的なものとなり、「虫の眼」の視点からの「日常の現実」から距離をおいた「鳥の眼」の視点となる、ということもいえるのである。

はじめに

第一章 ゲーテの『色彩論』

第一節 「生理的色彩」

第二節 「内的関連の概観」

第三節 「色彩の感覚的精神的作用」

第二章 “色”の持つ意味 ゲーテの「色彩観」を手がかりに

第一節 現代に結びつく色彩現象

第二節 色の特異的・性格的意味

第三節 色の感性的意味 現代心理学への発展

第三章 現代に生きるゲーテの「色彩観」

第一節 色彩療法 オーラ・ソーマを中心に

第二節 色彩環境 シュタイナー教育を柱に

第三節 ゲーテの色彩演出 『若きウェルテルの悩み』をもとに

おわりに

<要約>

『若きウェルテルの悩み』の著者として知られているドイツの文豪ゲーテは、19世紀初め、『色彩論』の中で「個々の色彩はそれぞれ独特の気分を心情に与える」と述べている。ゲーテは、すでに色彩が人間の心に何かしらの影響を与えると考えており、色彩が人間の心情に及ぼす変化について着目していた。私は、ゲーテが、人間は色に対してどのように心で感じ、色に対してどのようなイメージを持っているのかを心理的かつ感覚的側面から色というものを捉えたところに共感できた。

そこで、私は、身近にある“色”に注目し、ゲーテの『色彩論』を手がかりに、色のもつ意義を考え、また、ゲーテの色彩観が今日再び脚光を浴びている要因を考察し、色彩を楽しむことが幸福感や安心感につながるということをこれから明らかにしていきたい。

第一章では、ゲーテの『色彩論』の中から、「生理的色彩」、「内的関連の概観」、「色彩の感覚的精神的作用」という三分野の要約をし、ゲーテの『色彩論』がどのようなものを把握する。第二章では、ゲーテの色彩観をもとに“色”のもつ意味を考えていきたい。最後に第三章では、ゲーテの色彩観を支持している、シュタイナー教育やオーラ・ソーマを例に挙げて、今日再び再評価された要因を探っていきたい。そして、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』を取り上げ、ゲーテ自身の作品の中でゲーテの色彩観がどのように活かされているのかを見ていきたい。

はじめに

第一章「とらわれ」からの脱却

第一節「とらわれ」とは

第二節 とらわれることによって引き起こされる問題

第三節「とらわれ」から脱却するために

第二章「つながり」の感覚

第一節「つながり」とは

第二節 つながりの感覚の欠如によって起こる問題

第三節「つながり」の感覚の構築

第三章「つながり」の環境創造

第一節 学校教育における「つながり」の創造

第二節 家庭や地域における「つながり」の創造

第三節 社会全体での「つながり」の環境創造

おわりに

要 約

近年、登校拒否や「ひきこもり」、いじめといった社会問題が新聞やニュースで大きく取り上げられている。これらの社会問題はフリーターやニートと呼ばれる人々を生み出す一因となったり、いじめを苦しめた自殺を引き起こしたりと、社会全体に多大な影響を及ぼし、現代に生きる私たちにさまざまな疑問を投げかけている。その疑問に対して「一部の問題のある子どもたちが社会問題を起こしている」と断定し、これらの社会問題は特殊なものだと片付けようとするのではなく、「何が子どもたちに社会問題を起こさせているのか?」、言い換えると「子どもたちは何を求めているのか?」といった、問題の背景やその裏側に隠れている事実を突き止め、社会全体で議論することが必要であると感じる。子どもたちが起こす社会問題を子どもたちだけの問題だと狭い視野でとらえるのではなく、教育・家庭・地域社会といった外部からの、子どもたちに対する影響が及ぼす効果について深く考えるべきであろう。なぜならば、子どもたちに見られる変化は、子どもたち自身が独りでに変化したというのではなく、子どもたちを取り巻く環境が目まぐるしい変化を遂げているという現実と照らし合わせて考える必要があるためである。

社会に起こっている問題の原因は、私たちが「こうあらねばならない」「こうあるべきだ」という「とらわれ」の感覚にしばられ、過度の規範化を引き起こして現実感覚を失いがちになることにありと考えられる。つまり、社会問題を解決する糸口は「とらわれ」の感覚にしばられすぎず、個人個人に合った現実感覚をもつことにある。その上で、人と人との「つながり」の感覚を創造し、社会全体に広げていくことで、問題を子どもの問題、大人の問題と二元的にとらえることなく社会全体で解決する道筋をたどることができよう。社会に起こった問題を社会全体で解決する姿勢は、問題を問題としてだけとらえるのではなく、目線を変えて向かい合うことができるはずである。

そこで、第一章では私たちが現実感覚を失いがちになる「とらわれ」の感覚の概念について考え、「とらわれ」から脱却するにはどうすればよいかを見ていく。第二章では人と人との「つながり」の感覚について目を向け、「つながり」の感覚を作り上げる基礎となる子ども時代の成長過程についても触れながら話を進めていきたい。第三章では「つながり」の環境創造を行うためにはどうすればよいかを、子どもたちが過ごす教育現場・家庭・地域の3つの空間に分けて具体的に考えていく。

子どもの一挙手一投足は大人の育て方や学校教育と深く結びついており、子どもたちの問題行動はそのまま大人の病理性や大人社会の歪みの結果である。子どもたちの起こす社会問題は子どもの問題、それと大人とは関係ないと二元的にとらえるのではなく、子どもの問題は大人の問題でもあると一元的に社会問題をとらえ、社会全体に今何が起こっていて、どうすれば社会全体が心豊かになれるのかというより広いテーマで考えていくことがこの論文の最終目的である。